

『審判力』は『選手力』！

一流の所作とルール的女神が微笑む瞬間

2025年12月16日 PHOENIX愛知オンライン教室 ダイジェスト

なぜ、一流の選手は 「審判の視点」を持つのか？



「神は細部に宿る」—この言葉は、バドミントンにも当てはまります。

1本のサーブ、一瞬の足の動き、そして一つのジェスチャー。トッププレイヤーは、こうした細部にこそ勝敗を分ける本質が隠されていることを知っています。

このレッスンでは、単なるルール解説ではなく、審判の視点を通じて「選手としての格」を一段引き上げるための思考法を解き明かします。

Theme 1: 精密性 — 「取られるか否か」の境界線を知る

レッスンは、ある選手の「ショートサーブのフットフォルトは直っているか？」という問いから始まりました。



Analysis

- **Before:** 以前は足の動きが不安定で、フォルトのリスクを指摘されていた。
- **After:** 日々の意識改革により、フォームは着実に改善。

Key Insight

「取られない」レベルに達していても、まだギリギリのライン。この境界線を正確に知ることが、プレーの再現性を高め、微細な動作ノイズを消す第一歩となります。

塩澤コーチの眼

「うん。オッケーです。いや、これはね、取れない（フォルトは取れない）。明らかじゃないもん。...今ちょっとゆっくり送ってるよね。...これはね、遅く送ってこう。だから取れない。これはフォルト取れないです。」

— 塩澤コーチ (00:02:47)

****Takeaway****: コーチが見ていたのは「セーフかアウトか」だけではない。フォルトを取られない極限の動きをコントロールできているか、その再現性まで見抜いている。

Theme 2: 品格 — 一流の所作は、誤解なき敬意を表す



- 今回のハイライトの一つは、意外にも「審判の所作」に関する講義でした。
- 特に線審がアウトを判定する際のジェスチャー。それは単なる形式ではなく、国際大会でも通用する「誤解を生まないためのグローバルマナー」です。
- 正しい「型」を守るとは、試合への敬意であり、自身の品格の証明となります。

なぜ線審は「かかし」になるべきか？

Incorrect Gesture (パー)



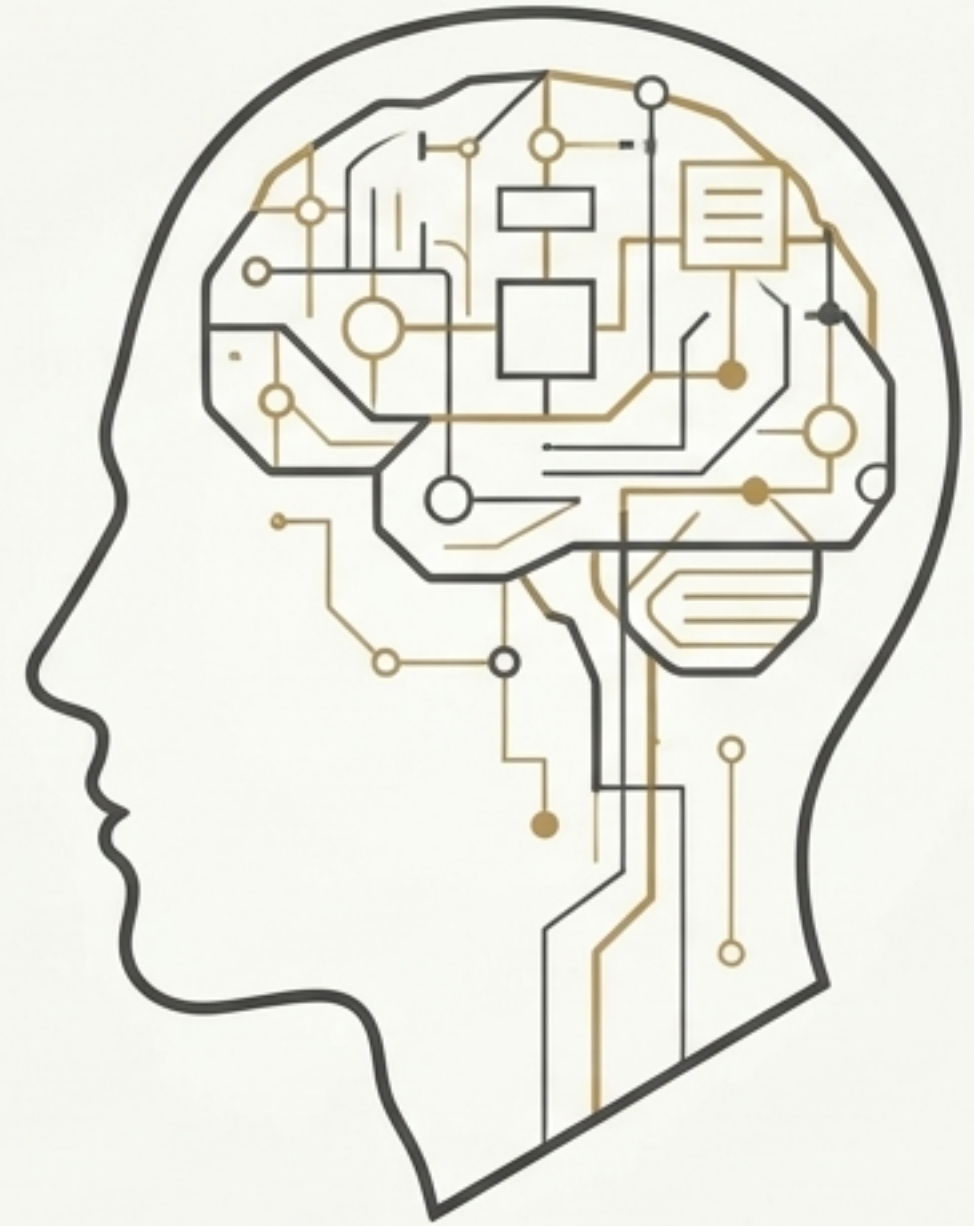
Correct Gesture (かかし)



The Reason: 海外では、手のひらを「パー」で示すと「お前は馬鹿か」という侮辱のジェスチャーや、単に「万歳」しているように誤解されるリスクがある。指を揃えて示すことで、判定への厳格さと選手への敬意を示す。

Theme 3: 知識 — ルールを知る者は、試合を制す

- シャトル交換の手順、判定の権限、予期せぬ事態への対処法。
- ルールを正確に知っているかどうか、試合中の無用なストレスを無くし、メンタルの安定に直結します。
- 知識は、プレッシャー下で冷静な判断を下すための「心の安定剤」となるのです。



あなたはこの難問に答えられるか？

審判資格を持つ選手に対し、塩澤コーチから出題された実践的ルールクイズ。
トッププレーヤーに必須の「知識」が試されます。

Question 1:

状況: サービス時、選手の足が邪魔で主審からセンターラインのイン/アウトが見えなかった。主審は線審に判定を尋ねた。この対応は正しい？

A 正しい

B 間違い

実践ルールクイズ（続き）

Question 2:

状況: シャトルがポールの外側を通過して相手コートに入った。判定は？

A: イン

B: アウト

C: フォルト

Question 3:

状況: ファイナルゲーム。11点のチェンジエンスを忘れ、13-5まで進んでしまった。どうする？

A: 気づいた時点で交代。点数はそのまま。

B: そのゲームは無効とし、11点からやり直す。

C: 11点に戻し、コートを交代して再開。

解答と解説

Answer 1: 間違い

- センターラインの判定は「主審」の管轄。線審に尋ねてはならない。見えなかった場合は「レット（やり直し）」をコールする。

Answer 2: フォルト

- アウトではない。「フォルト」とコールする。ルール上、シャトルはネットの上（ポストの内側）を通らなければならない。

Answer 3: 気づいた時点で交代。点数はそのまま。

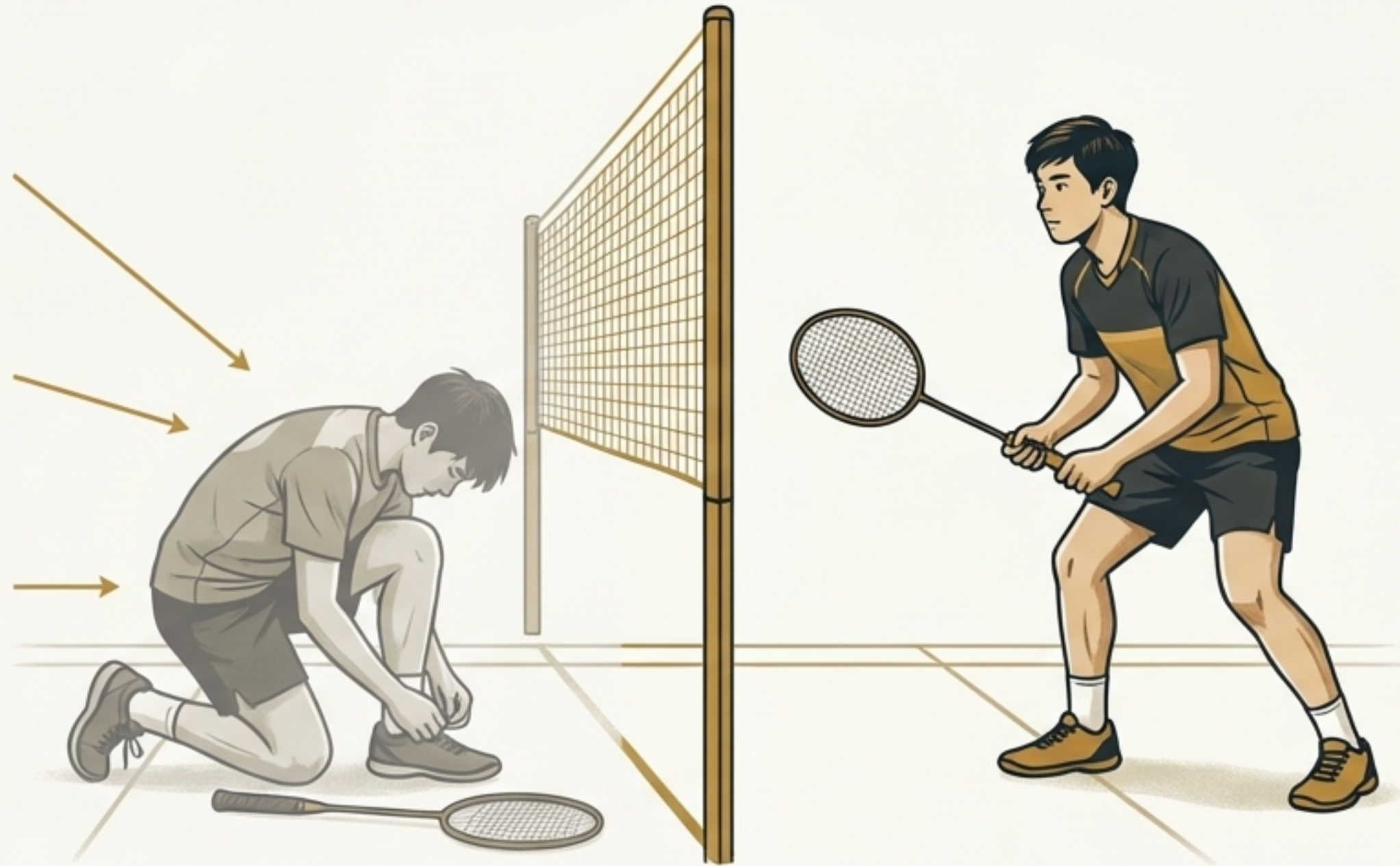
- 主審がまず謝罪する。その後、即座にコートを交代し、点数は13-5のまま再開する。

ケーススタディ：小学生大会決勝に見る「態度の差」

劣勢になった選手が見せた行動の分析。

Observed Behaviors (弱さの証明):

- ミスをする、と、靴紐を結び直すなどして「時間稼ぎ」をする。
- シャトル交換を主審ではなく、相手選手に直接要求する（ルールの無知）。
- 対戦相手への感謝や敬意が感じられない。



Conclusion: 技術の差の前に、コートに立つ姿勢、ルールへの理解、そして誠実さ（インテグリティ）の差が勝敗を分けていた。態度の悪さは、精神的な未熟さと弱さの証明に他ならない。

ミスを認める勇気

(Quiz 3の状況) チェンジエンスを忘れた主審が取るべき行動について。

「やっぱり主審が間違っちゃったのでしっかり
プレイヤー、お互いのプレイヤーに謝らなくて
てはいけないね。まずは申し訳ないです。間違
えましたって。…それがやっぱ大事なので。」

— 塩澤コーチ (00:49:09)

Takeaway: 権威にあぐらをかかず、誠実に対応する。この姿勢こそが、
選手からも、そして試合からも信頼される人間の条件である。



結論：審判ができる選手は、試合を支配できる

「審判力」とは、3つの力で構成される「選手力」そのものである。



精密性 (Precision)

「神は細部に宿る」。フォルトを取られないギリギリを制御する技術。



品格 (Poise)

「一流の所作」。指先まで意識の行き届いた姿勢が、心の安定を生む。



知識 (Knowledge)

「ルールを熟知」。知識を武器に、無用なストレスを無くし試合をコントロールする。

理論の先へ。その目で、本質を確かめる。

- ダイジェストでは伝えきれなかったコーチの鋭い指摘、議論の深さ、そして一流の思考法。
- 「審判の視点」を手に入れることで、あなたのバドミントンは、次のステージへ進化します。

今すぐフル動画を視聴し、コートで今まで見えなかった景色を手に入れてください。

▶ 2025.12.16 オンライン教室フル動画を視聴する

「次回の練習では、ぜひ『審判目線』を
持ってコートに立ってみてください。
今まで見えなかった景色が、
きっと見えるはずです。」



PHOENIX Aichi